

小学校外国語活動で身に付く英語力

岡崎 浩幸

The Acquired English Proficiency of Elementary School Foreign Language Activities

Hiroyuki OKAZAKI

摘要

本実践研究は、K市の国際化特区成果検証事業の一環として実施された面接によるスピーキングテストで得られたA小学校6年生のデータを分析し考察を行ったものである。研究の目的は、小学校生が65-95時間の英語活動によってどの程度の英語力を身につけるのか、また発問に対する反応として表出される英語にはどのような特徴があるのか調査することである。このような評価テストの計画・実施が指導者にどのような影響を与えるのかについても調査した。70～80%の児童が簡単な質問を理解し、応答できるようになっていた。発音に関しては予想以上にカタカナ英語は少なく、おおむね英語らしい発音で応答できていた。さらに、方略的能力が身につけている児童もいた。またスピーキングテストによる評価の計画・実施が、指導者（ALT, JAT）の授業見直しや改善に影響を与えることも明らかになった。

キーワード：小学校外国語活動 スピーキングテスト 英語力

Keywords : elementary school foreign language activities speaking test English language proficiency

I. はじめに

2011（平成23）年度から必修化される外国語活動（英語活動）は、言語文化の体験的理解を深めること、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成、音声や表現に慣れ親しませることを目標として、基本的な表現の習得やスキルの向上のみを目標としていない（cf. 文部科学省, 2008）。しかし、2年間70時間の英語活動を体験して、英語力が身につかないはずがないであろう。金森編（2003）は「スキルや知識を育てることだけが中心になってはいけませんが、スキルや知識の習得は『関心・意欲・態度』の表れであると考えますとスキルや知識がまったく身につかない学習は存在しないことになる」と主張する。また目標に掲げられていないから、英語力を測定する必要はないということにもならないだろう。

評価のない外国語指導などない（湯川・高梨・小山・川中, 2009）と言われるように、到達目標、指導方法、教材を改善していくために、指導内容の成果を測っておくことは、評価の重要な要素であることに異論はないであろう。しかしながら、小学生にスピーキングテストなどの評価ツールを用いて、聞くこと話すことに関する能力を直接測定した例は、筆者の知る限りでは非常に少ない。

文部科学省が実施した小学校英語活動実施状況調査結果（2005年度、2006年度、2007年度）によると、全国の

93.6%（2005年度）、95.8%（2006年度）、97.1%（2007年度）の公立小学校が英語活動を実施している状況で、小中英語教育連携の重要性が強調されながら、小学校の英語活動でどのようなことが行われているのか、どのような力が身に付くのかなどについて状況を把握し、関心を抱いている中学校英語教員は少ない（Benesse, 2007；高木, 2006）。また、中学校教員には成果が見えにくく、実際のところ、身についた力を中学校で継続的に生かす試みはまだほとんど進んでいない（湯川・高梨・小川, 2009）。小学校英語の成果を活かし、より発展した指導を継続していくためには、英語活動でどのような内容が扱われ指導が行われていたのか、またそれによってどの程度の英語力が身につけているのかに関する情報は中学英語教員にとって、ますます重要になることが予測される。

本稿は、小学生が2～3年（65～95時間）の英語活動でどの程度の英語力を身につけるのか、小学生が発する英語の表現や発音にはどのような特徴があるのか調査することを目的とする。さらに、小学生の英語力を直接評価する試みは指導者の意識や指導にどのような影響を与えるのかも明らかにしたい。

2009～2010年度は移行措置期間であり、ほぼ全小学校で英語活動が実施されている。今後さらに検討・整備が必要となる小学校英語教育の向上のために本事例が一助となれば幸いである。

Ⅱ. 先行研究

小学生の英語力について一般に公開された調査報告は非常に少ない。筆者の知る限り、スピーキングテストを使用した報告は白畑 (2009), 湯川・高梨・小山・川中 (2009), 湯川・高梨・小山 (2009) のみである。

白畑 (2009) は、静岡市内のB小学校に在籍する5年生42名と6年生31名を対象に英語力を調査した。対象児童は、担任とALTの2人体制でALTを中心とした形態で3, 4年間 (140, 210時間) 英語の授業を受けてきた。調査は、1対1の面接方式で授業で扱った表現を発問して応答及び行動で反応させて行われた。20項目中、90%以上の正答率を示した質問が11項目あり、80%以上の正答率を示したものが15項目あった。5年生から6年生にかけて英語力は上昇しており、質問別困難度においても、5, 6年生はほぼ同様の傾向を示した。英語能力を第一義的目標としない授業形態を採っていても、週1時間を3, 4年間継続すると、扱った項目に関する英語能力が身につくことが示された。

湯川・高梨・小山 (2009) は、私立小学校3校と、教育特区として英語を教科として教えている公立小学校1校、計4校の6年生 (236名) の英語力を調査した。対象児童は、1年週1時間、2年から6年次まで1時間から2時間程度の授業を受けてきた。授業形態は学校によって異なり、ALT, 担任の2人の場合、ALT, 担任, JTE (日本人英語教員) 3人の場合がある。評価方法は「足場」のあるスピーキングテスト¹を使用し、発音、語彙・文法、集中力、表現力、会話統制力の5つの観点で1から4のレベル (4が最高) で英語力を評価した。結果はどの観点についても平均以上で2.84～3.83であった。全員がおおむね英語らしい発音で応答できおりカタカナ英語はまれであった。「文法・語彙」も平均以上 (2.84) であったがばらつきが大きく個人差があった。言語的、また非言語的能力を駆使して表現に成功したかどうかを評価する「表現力」は平均3.06で比較的高く、3分間の楽しい会話を何とかこなせるだけの「表現力」は持ち合わせていた。「会話統制力」は2.87で、おおむね対話をスムーズに運ぶことができるが個人差がもっとも大きかった。

以上から、英語の語彙や文法の未熟な小学生でも、恐怖感やストレスが少ない状況で適切なタスクとして与えれば、自分の持ち合わせている様々な工夫を凝らして英語でコミュニケーションができることが明らかになった。最後に、我が国の早期英語教育が目指すべきコミュニケーション能力とは、文法力や語彙力、音声能力、語用論及び社会言語学的な能力などの言語能力を基盤とし、対人コミュニケーションを円滑かつ効率よく行うため、また文法・語彙力が乏しいときに必要とされる方略的能力²を含めた、複合的なものであると結んでいる。

さらに、湯川・高梨・小山・川中 (2009) は、上述し

た4校と比べて全般的に英語熱も低い小学校6年生48名を対象に英語力を調査した。対象児童は2年次に年間5時間程度、3～6年次にはおおよそ週1時間程度英語活動の授業を受けてきた。授業形態はALTやJTE主導以外に担任のみで行う場合もある。評価方法は上述と同じ「足場」のあるスピーキングテストを用い、観点、評価方法も同じものを採用した。結果は、発音以外、他の4観点すべてにおいて4校よりも平均は低かった (2.27～2.75)。会話としてスムーズに運ぶための工夫など不十分な箇所は多々見られたが、初対面のネイティブスピーカーとの会話をどのペアも3分間会話を継続できた。また、指導者である担任2名から、この評価で児童の英語力の伸びがよく理解でき、今後の授業の課題を明確にすることができたという肯定的なコメントが得られた。

Ⅲ. 目的

今回調査する英語力は、「質問者の発する英語を聞いて、その英語内容を理解しかつ相応の反応ができる能力。または質問に対し適切な行動で反応することができる能力」(白畑, 2009) を意味する。小学校の英語の授業で触れた英語表現を指導者 (面接官) が発問し、その意味を理解し、相応の反応および適切な行動で反応できるか調査する。

本研究は、小学生が65～95時間の英語活動でどの程度の英語力が身に付くのか、また、児童が表出した英語にどのような特徴があるのかも調査する。さらに、このような評価を計画・実施することは、指導者にどのような影響を与えるのかについても明らかにする。

研究課題は以下の通りである。

- RQ 1 65～95時間の英語活動によってどの程度英語力が身に付くのか?
- RQ 2 スピーキングテストを通して小学生が表出する英語にはどのような特徴が見られるか?
- RQ 3 スピーキングテストの計画・実施は英語活動指導者にどのような影響を与えるか?

ただし、本研究の結果がすべての小学校英語の取り組みや成果と一致するということではない。調査対象となるK市小学校は「特区」認定³を受けているため、指導体制や時間数は異なるので結果から示唆を得る際は注意を要する。しかしながら、K市の英語活動の目標⁴が、2011 (平成23) 年度から必修化される外国語活動の目標と共通点が多く見られること、またK市で扱われている英語表現やテーマが英語ノート⁵で扱うことになっているものとほぼ同じである点を考慮すると、特区成果検証事業で得られたデータ分析や考察が2011年度から完全実施される小学校英語活動の成果の把握や向上のために、一考の価値があると思われる。

IV. 研究方法

1. 研究対象校ならびに対象児童

A小学校が位置するK市は、「特区」認定を受け、2006（平成18）年度から教科として英会話科を設置し、独自のカリキュラムで英語の授業を実施してきた。小学1, 2年生は月1回, 3～6年は週1回英会話科の授業を受けている。授業はHRT（担任）、ALT、JAT（日本人英会話講師）の3人体制で実施されている。

A小学校の対象児童は計77名で、英語活動時間の内訳は以下の通りである。2007年度65時間、2008年度95時間で、2011年度から全国で実施される70時間（5年次35時間+6年次35時間）と一致していないが、2007年度調査はおおよその目安となる時間数である。

2007年度調査 (2008年2月1日実施)	対象：6年生35名
活動時間：計65時間＝5年次35時間, 6年次30時間	

2008年度調査 (2008年12月8日実施)	対象：6年生42名
活動時間：計95時間＝4年次35時間, 5年次35時間, 6年次25時間	

2. 英語力測定

(1) 方法

評価方法として、1対1の面接によるスピーキングテスト⁶を用い、質問に対する児童の応答を調べた。面接によるスピーキングテストは6年生の児童を2グループに分けて別々の部屋で実施した。面接官は同児童を教えているALTとJATが務め、同時に採点も行った。もう一人採点者として、それぞれの部屋に筆者と元中学英語教員経験者が加わり、各部屋2名で行われた。

(2) 採点方法

面接の様子はすべてビデオに録画された。児童の英語能力を「質問者の発する英語を聞いて、適切な英語で応答できる能力および適切な行動で反応できる能力」(cf. 白畑2009)と定義し、以下の基準で採点した。ただし、Q2は動作を伴う回答だったため、動作が適切な場合2点、動作が適切でないか、動作が生じない場合0点とした。

2点	応答にほとんど問題なしの場合
1点	応答としてはほとんど問題ないが約5秒以上を要する、あるいは表現等に不適切な箇所がある場合
0点	沈黙あるいは応答として成立していない場合（日本語で応答した場合も含む）

(3) 質問内容

質問数は、両年度とも5問（表1）であった（2008年度は第4問の応答に対してWhy?と聞いているのでそれを含めると6問）。質問項目（表1）および期待される応答はすべて授業で学習した内容である。ALTとJATが児童の学習状況を考慮し、妥当であると判断して、質問を5個に絞った。

Q1, 2, 3, 5は両年度同じ質問であるが、Q3の期待される応答は、2007年度ではカナダ国旗の色「red and white」であったが、2008年度は「brown」に変更した。Q4は、2007年度「将来なりたい職業」を尋ねたが、応答にかなり時間を要したことや壁に貼ってある絵にない職業になりたい児童が戸惑ったことから、2008年度はDo you like English?の質問に変更し、さらにYes/Noの応答直後に、その理由（Why?）を尋ねた。Q2は、応答を期待する質問ではなく、面接官の英語を理解し、対応するカードに手で触れることができるかどうかを調べるものである。

3. 指導者へのアンケート

スピーキングテスト後、面接官を担当したALT2名（2007年度カナダ人ALT、2008年度アメリカ人ALT）と日本人英会話講師（両年度とも担当）1名に、自由回答方式のアンケートを送付して全員から回答を得た。以下は質問内容である。

- 質問1 スピーキングテストの計画・実施から何を学びましたか（気づいたことや発見）？
 質問2 スピーキングテストの実施や結果がその後の指導にどのような影響を与えましたか？
 質問3 スピーキングテストをどのように改善すべきだと思いますか？

V. 結果

1. スピーキングテスト結果

スピーキングテストの結果は、表2, 3の通りである。図1は年度別に正答率を表したものである。年度別の採点者間信頼性係数はそれぞれ2007年度 $r = .87$, $r = .89$, 2008年度 $r = .80$, $r = .95$ であった。

表2, 3から分かるように、2007年度においてQ4以外の正答率(Q1 = 88.6%, Q2 = 95.7%, Q3 = 80.0%)が80.0%～95.7%の範囲にあり高い定着率を示している。2008年度もQ3以外の正答率(Q1 = 98.8%, Q2 = 79.8%, Q4 = 84.5%, Why? = 70.2%, Q5 = 91.7%)が70.2%～98.8%の範囲にあり高い定着率を示した。表4には、児童の発話した英語の特徴を調査するために、質問に対する発話が質問ごとに分類し、載せてある。()内の数字は完全な文で応答した人数を表している。Q2では、行動で反応することが期待されていたために、英語の発話は存在しない。

2. 指導者へのアンケート結果

表5は3つの質問に対する回答文を要約して記載した

ものである。ALTの回答は筆者が日本語に翻訳して載せた。

表1. 質問項目

2007年度	2008年度
Q1. Hello! How are you? (机上に並べられた各教室の絵カードを見せながら)	Q1. Hello! How are you? (机上に並べられた各教室の絵カードを見せながら)
Q2. Please touch the nurse's office. (カナダの国旗を見せながら)	Q2. Please touch the nurse's office. (茶色のカードを見せながら)
Q3. What color do you see? (壁に貼ってある様々な職業を表す絵を見せながら)	Q4. I like English. Do you like English? Why?
Q4. I am a teacher. I like this job. What do you want to be?	Q5. What time do you go to bed?
Q5. What time do you go to bed?	Q5. What time do you go to bed?

表2. 2007年度 平均値と標準偏差

	<i>M</i>	<i>SD</i>	正答率 (%)
Q1	1.77	0.60	88.6
Q2	1.91	0.37	95.7
Q3	1.60	0.69	80.0
Q4	0.94	0.87	47.1
Q5	1.46	0.78	72.9

表3. 2008年度 平均値と標準偏差

	<i>M</i>	<i>SD</i>	正答率 (%)
Q1	1.98	0.15	98.8
Q2	1.60	0.73	79.8
Q3	1.02	0.96	51.2
Q4	1.69	0.72	84.5
Why?	1.40	0.86	70.2
Q5	1.83	0.49	91.7

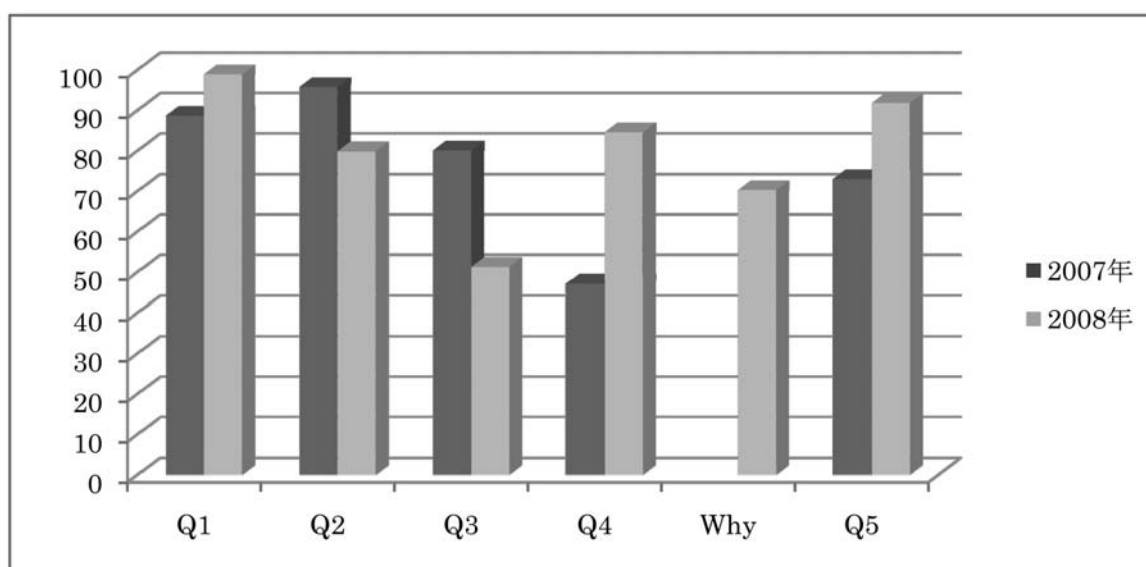


図1. スピーキングテストの年度別正答率

表 4. 質問に対する発話一覧

質問	2007 年度 65 時間体験児童 (n=35)		2008 年度 95 時間体験児童 (n=42)	
	児童の発話	頻度	児童の発話	頻度
Q1	Fine./ Fine, thanks. And you. I have a cold. My name is... Please help me. その他 沈黙	27 1 1 1 4 1	I'm great./ Great. I'm fine, thank you. Sleepy. Cold. Good./ So so. 解答後 How are you? と聞き返す	19 10 5 4 4 12
Q3	(I see) red and white. Red white. Red <u>o</u> whit <u>o</u> (カタカナ発音) Red. Please help me. その他	24(12) 4 3 1 1 2	(I see) brown. 日本語で「ちゃいろ」 No, I don't. Please help me. その他 沈黙	18 (9) 4 1 1 6 12
Q4	I want to be a ... 職業名 . soccer player 4 piano teacher, nurse teacher, teacher 4 baseball player 3 wrestler 2 baker, patissier, cameraman , scientist volleyball player, carpenter 各 1 名 日本語で「職業名」 日本語で「まだ決まっていない」 その他 Please help me(2) 沈黙	19 (4) 3 2 4 7	Yes. / Yes, I do. I like English. No. Help, please. その他 沈黙 追加質問 why? Fun./ It's fun. Because it is fun. / Because it is not fun.(1) Interesting./ easy. その他 沈黙	33 1 2 1 5 19 10 2 6 5
Q5	(I go to bed) ten, ten thirty etc. その他 (thirty の発音に問題あり 1 名) 沈黙	27(10) 4 4	(I go to bed) ten, ten thirty etc. 沈黙	40(16) 2

表 5. アンケート結果要約

	JAT(2007, 8 年度)	ALT(2007 年度)	ALT(2008 年度)
質問 1 スピーキングテスト計画・実施から何を学びましたか？	<ul style="list-style-type: none"> 初めて児童の英語力を測ることができた。 Q1に対して本当の気持ちを伝えることができたり、面接者に逆に聞いてくる児童もいたりして驚いた。 どのような発問が適切なのかを学んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> 個々にやりとりができたことで児童の応答や反応の仕方について学ぶことができた。 実際に教えたことが定着しているかどうかわかった。 支援をしてしまったが個々に関わることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が教えたことの多くを覚えていることがわかった。 指導の成果と改善点がわかった。
質問 2 テストの実施や結果がその後の指導にどのような影響を与えましたか？	<ul style="list-style-type: none"> どのトピックに、どのくらいの時間をかけるべきかわかってきた。 児童への発問の仕方が変わってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> テストの結果を参考にして、児童のレベルに合ったように内容を調整している。 個々の児童の定着度がわかってきたので、個々への関わり方が変わってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 復習の大切さがわかったので、毎回新しいレッスン前に復習に時間を割いている。1時間を復習にあてることもある。 教える前に生徒が何を知っているのかを調べてから授業を始める。
質問 3 テストをどのように改善していくべきか？	<ul style="list-style-type: none"> 同じ児童に5, 6年と縦断的に調査すべき。 	<ul style="list-style-type: none"> 質問の順番が自然な流れになるように改善すべき。 	<ul style="list-style-type: none"> 質問がもっと個人的かつ自然な流れになるように改善すべき。もっと多くの質問があれば実態をより詳しく把握できる。

VI. 考 察

RQ 1, 2 に沿って、質問ごとに考察を行う。

1. 英語力と英語の特徴

(1) Q1. How are you?

Q 1 は授業で毎回行われている挨拶ができるかどうかを測るものである。表 2, 3 からわかるように、2007年度は 9 割近く、2008年度はほとんどの児童 (98.8%) が How are you? に何らかの応答ができるようになっている。2008年度が 5%水準で有意に高いことが認められた。この結果は白畑 (2009) の結果と類似している (5年生 97.6%, 6年生 100%)。普通の小学校でも毎日挨拶は実施しているので、ほぼ同じ割合でできるようになることが予想される。英語の特徴をみてみると (表 4), 2007年度よりも2008年度の児童は発話の表現が豊かになっていることから、一つの言い方を暗記しているのではなく、そのときの自分の気持ちに応じて応答できるようになってきている。表 5 の質問 1 に対する JAT の回答からもわかるように、面接官に How are you? と聞き返してくる児童が半数もいたことや単なる挨拶でなく児童の本当の気持ちを伝えることができるようになっていることは、指導者の期待以上の成果だったと考えられる。

(2) Q2. Please touch the nurse's office.

Q 2 は理解力のみを測る質問で、2007年度 9 割以上、2008年度は約 8 割の児童が理解できていたが不思議なことに2008年度の方が低く、年度間に 5%水準で有意な差があった。理由を JAT に聞いたところ、2008年度はテスト前に十分な時間がなく、校内の「部屋の名前」というテーマについて 1 回しか指導できなかった、一方2007年度はカナダ出身 ALT の友人の勤務する高校へ、A 小学校の部屋を紹介する DVD を送付することを目標に掲げていたため、3 回指導したとのことであった。このことから、テスト間際に活動を 1 回実施するよりも何回かに分けて指導を行うことの大切さがわかる。さらに、カナダの高校生に自分たちの学校を紹介したいという英語でコミュニケーションする目的が明確な場合に、効果が上がる可能性を示唆している。今年度、英語ノートを使用した指導が全国で行われているが、毎回ノートに沿って活動をこなしていくような指導ではなく、英語を使用する目的を明確にして、場面や活動を変えて同じテーマで何回か指導する方が英語の表現等が児童の記憶に残る可能性も高まると考えられる。

(3) Q3. What color do you see?

Q 3 について、両年度の質問は同じだが期待する解答は異なった。2008年度は、ALT の提案で red and white は簡単すぎるので、別の色に変更することが提案され brown のカードを採用した。しかし正答率は一番低くな

り、ばらつきも一番大きくなった (表 3)。質問を理解していたと判断できる児童を確認したところ、約 9 割であった。つまり、大半の児童は質問を理解していたが brown という単語が思い出すことができず応答しなかったものと推測される。(2) Q 2 で指摘したように、新しい語彙を 1 回提示すれば定着させられると考えず、何度も触れる機会を与えることの必要性がここでも再確認された。

表 4 の2007年度の発話にカタカナ発音 (典型的な日本人英語) がみられたが少数 (3 名) であった。Q 3 以外でもカタカナ発音に近いものはあったが発音はおおむね通じる範囲で、コミュニケーションに支障をきたすようなものはほとんど見られなかった。湯川・高梨・小山・川中 (2009) と湯川・高梨・小山 (2009) でも同様の結果を得ているが、小学生にこのような実践を 2~3 年継続すると、発音に関してはコミュニケーションに支障をきたさない程度の効果を期待できると考えられる。

(4) Q4. What do you want to be? (2007) / Do you like English? Why? (2008)

Q 4 は、年度によって質問が異なっている。2007年度は「将来の職業」を尋ねる質問で正答率は 47.1% (表 2) だったが、なりたい職業を英語で言えないために日本語で答えたり、なりたい職業が決まっていなかったり、なりたい職業はあるが壁に張ってある絵の中になかったために解答できなかった児童が多くいた。質問を聞き取れていたと認めることができる児童は約 7 割いた。このような職業を問う内容は中学校 2 年でも扱うことを考慮すると、児童の半数が応答できたことは正答率が低いとは言えない。

表 4 からわかるように、I want to be a... のあとに、なりたい職業をあらわす単語が幅広く使われていることから、本当に児童が言いたいことを述べようとしていることが窺われる。このような自己表現を大切にしたい指導が中学校でもさらに維持・発展されていくことが望まれる。

2008年度は英語の好き嫌いを問い、続けてその理由 (Why?) を尋ねた。約 85% が Yes/No で応答でき、その理由を約 7 割が適切に答えているのは驚きに値する。さらに、Why? に対して It's fun という応答が多かったものの、interesting, easy などの形容詞を使う児童もいた (表 4)。また、約 25% の児童は because を使うこともできた。中学校において、Why? の質問に答えられるように、教師が苦勞していることを考えると、この結果は予想以上の成果であり、中学教師が今後どのように維持・発展させていくかという点で、大いに参考なると思われる。

(5) Q5. What time do you go to bed?

Q 5 は、就寝時間を尋ねた質問で、身の回りの生活について語るができるようにする目的でよく用いられる。初年度 72.9% (表 2)、翌年 91.7% (表 3) と順調に伸びて、年度間に 1%水準で有意な差が認められた。中

学1年でほとんどの疑問詞が指導されることになるので、小学校のうちに音声として慣れ親しんでおけば、中学生の負担と指導者の負担を少しは軽減できる可能性がある。

2. 指導者へのアンケート結果からの考察

3名の指導者の結果から一般化することは難しいが、3名に共通した記述をまとめて考察を行いたい。まず今回のテスト実施から指導者としてどのような情報を得たのかについては、湯川・高梨・小山・川中（2009）でも指摘されているように、自分たちの指導の成果を振り返ることができ、どのような表現が身に付いていて、何が身に付いていないのかについての情報が得られたことは価値があったと指導者は考えていたようである。児童がうまく応答できなかった箇所については、なぜそうなったのかその原因を考察し、次回に活かそうとする態度が読み取れる。また一人ひとりの生徒と面接する機会を得て、個々の児童のコミュニケーションに取り組む態度や英語力理解につながったのではないかと思われる。さらに、表5 質問2のJATやALT（2007）の回答から窺えるように、テスト形式については面接官から一方的に質問する形式でなく、コミュニケーションの一環として、相互のやりとりを評価する形式や教師が児童の発話を支援しながら続けていく形式の導入を検討する必要がある。

その後の指導にどのような影響を与えたかに関して、個々の児童との関わり方が変わったなどの回答から、意識の変化が読み取れる。Q3でbrownのカードに変更を提案したALT（2008年度）は、児童がbrownという単語を思い出せなかったことから、1度だけの活動で終わらず、何回か反復（復習）することが児童には必要なことを学んだようである。

質問の順序について、両ALTはHow are you?の後に、Please touch the nurse's office.が続く不自然な流れのために児童が戸惑った場面があったとして、テストの改善を求めている。自然な会話になるように一方的な質問形式でなく、インタラクションが含まれる活動になるよう改善していく必要がある。

VII. まとめ

本実践研究の目的は、小学生が65～95時間の英語活動によって、どの程度の英語力を身につけるのか、またどのような英語表現を使っているのかその特徴について調査することであった。A小学校は特区指定を受けているので、普通の公立小学校とは授業形態や時間数は異なるが、本研究から得られた知見は、2011年度から必修化される小学校外国語（英語）活動の成果を予測し指導に役立つであろう。研究課題に沿って、本実践研究から得られた知見をまとめる。

RQ1について、一部の表現を除いて、70時間程度の

英語活動を行えば、70～80%の児童が簡単な質問を理解し、応答はできるようになることが予想される。質問を理解する力はさらに高まるだろう。ただし、1回のみの活動では効果が薄く、中学校に進む頃にはほとんど記憶に残らないことが予想される。場面を変えて何度も触れる機会があれば、中学校での生徒の学習負担が軽減されることになるだろう。

RQ2について、英語の特徴としては単なる暗記ではなく、意味を理解して自分の意図や自分のことを伝えることができるようになってきている。またどの質問項目でもPlease help meなどが用いられていることから、相手の質問が分からない場合でも簡単に諦めず、コミュニケーションを継続していこうとする態度も身につけている。いわゆる方略的能力を保持していると思われる児童もいる。湯川・高梨・小山（2009）は方略的能力を我が国の早期英語教育の目指すべきコミュニケーション能力の重要な側面であると主張している。本研究においてもその重要さが再確認された。この能力は中学校でも継続して伸ばしていくことが望まれる。

発音に関しては予想以上にカタカナ英語は少なく、おおむね英語らしい発音で応答できている。この結果は、湯川・高梨・小山（2009, p.111）のスピーキング結果とも一致している。中学校で発音指導を適切に行えば、小学校の担任が心配しているほど深刻な問題にはならないだろう。

RQ3については、テストの計画・実施が指導者に影響を与えていると言える。本テストは指導者が児童の英語力を検証することにより、自分の指導を見直し改善することを目的として2年前から実施されてきた。その意図した通り、指導の見直しや改善に影響を与えることがわかってきた。スピーキングテストを通して、個々の児童の発話や児童のコミュニケーションを図ろうとする態度が観察でき、自らの指導の成果や課題を把握できる。さらに児童一人ひとりと面接することで、成長の度合いを理解できただけでなく、個々の児童に必要な支援方法を見直す貴重な機会となった。

最後に、今回の評価活動では、担任を含めずスピーキングテストを行ったことが大変悔やまれる。今後は、支援者や採点者としての参加を考慮すべきである。担任にとって、個々児童の積極的にコミュニケーションに取り組む態度を間近に観察できる貴重な機会となる。さらに、児童がどこで躓くのか、どのような支援が必要なのかを担当が知ることは、今後の指導に欠かせない情報となるであろう。

謝辞

本調査はK市ならびに佐竹康子先生、松田敏宏先生の全面的な協力を得て行いました。関係の先生方には心から感謝申し上げます。

注

- 1 湯川・高梨・小山が開発したYTKスピーキングテスト（「足場」のあるスピーキングテスト）は、1人の初対面のネイティブスピーカーを前に児童2人が自己紹介や相手に対する質問など、3分間おしゃべりするタスクである。その間分からなければ、問い直すことや2人で相談すること、日本語にスイッチすることもよいという「足場」のあるタスクである（湯川・高梨・小山・川中、2009）。その3分間の会話を5つの観点（発音、語彙・文法、集中力、表現力、会話統制力）で1から4のレベルで評価する。
- 2 Canale & Swain (1980) は、方略的能力を「言語を運用する中で起こる様々な状況や、不十分な言語知識に起因するコミュニケーション上のbreakdown（中断）を修復する力」と定義している。小学生の言語知識（文法、語彙など）は限られているので、コミュニケーションを継続するためにこの能力が必要となる場合が多い。
- 3 構造改革特区制度「特区」の認定を受けると小学校で英語を教科として教えることができる。
- 4 K市小学校英会話科の目標は「初歩的な英語学習を体験することや外国の人とのふれあいなどを通して、外国の言語や文化に対する興味や関心、親しみをもたせ、よき国際人としての素地を養うとともに、英語による実践的なコミュニケーション能力の基礎を培い、進んでコミュニケーションをしようとする態度を育てる」である（筆者が学習指導要領の示す目標と類似していると思われる箇所に下線を引いた）。
- 5 英語ノートは5年用、6年用がある。文部科学省が作成して2009年4月、すべての小学校に配布した。英語ノートは教科書でないので法的に使用義務はないがほとんどの小学校で使用されている。富山県では2010年度K市を除くすべての小学校が英語ノートを使用して外国語活動を実施している。その使用方法を学ぶための講座も県主催で開催されている。
- 6 面接によるスピーキングテストは、K市の国際特区成果検証事業の一環として実施されたものであって、本実践研究のために実施されたのではない。趣旨は「英会話科で慣れ親しんだ英語表現を用いて1対1による面接を実施し、児童がどの程度反応できるかを検証し、今後の英会話科の指導に生かす」ことである。

引用文献

- Benesse (2007).「第1回 小学校英語に関する基本調査」『研究所報』, 41.
- Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics*, 1 (1), 1-47.
- 金森強編 (2003).『小学校の英語教育—指導者に求められる理論と実践』. 教育出版.
- 白畑知彦 (2009).「小学生の英語熟達度調査」.『中部地区英語学会紀要』第38号, 173-180.
- 文部科学省 (2005)「小学校英語活動実施状況調査（平成17年度）結果概要」
- 文部科学省 (2006)「小学校英語活動実施状況調査（平成18年度）結果概要」
- 文部科学省 (2007)「小学校英語活動実施状況調査（平成19年度）結果概要」
- 文部科学省 (2008).「新学習指導要領 小学校学習指導要領解説：外国語活動編」2009年9月10日検索 Available:http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_012.pdf
- 高木亜希子 (2006)「小学校の英語活動と中学校の英語授業の連携—公立中学校教員を対象とした意識調査—」.『英語授業研究学会紀要』第15号, 21-31.
- 湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春 (2009).『小学校英語で身につくコミュニケーション能力』.三省堂.
- 湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春・川中尚 (2009).「小学校英語活動における評価ツールの活用」.『小学校英語教育学会紀要』第9号, 55-62.

(2010年8月31日受付)

(2010年10月6日受理)